

氏名	田上 英江
ヨミガナ	タガミ ハナエ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第252号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 現代の管弦楽作品における即興の可能性 ーブーレーズ《プリ・スロン・プリ》より《たまもの》の創作過程を 中心にー 〈演奏〉 Veinure pour orchestre

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	小鍛冶 邦隆
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	野平 一郎
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	福中 冬子

（論文内容の要旨）

本論文は、ピエール・ブーレーズの《プリ・スロン・プリ》冒頭楽章《たまもの》を題材に、現代の管弦楽作品における「即興」の可能性について考察することを目的とする。管弦楽初版（1967年）と改訂版（1989年）とを比較対照し、主として指揮者に即興性を要求するために楽譜に管理されつつ導入された時間的な、特に諸楽句の持続とその集積結果としての音響現象に関わる不確定性に焦点を当て、その変遷をめぐる分析を行う。

本論第1章では、初版において形式分節ごとの書法を特徴づけている2つの不確定性の導入手法、すなわち、1s、2s...といった実践的な概念（本論文では「数字+s記号」と表記）と相対的な音価とに基づいて時間構造を全面的に不確定にする手法と、従来の拍子記号と絶対的な音価の使用を前提としつつも部分的に不確定な要素や柔軟な解釈の可能性を挿入する手法とに着目し、記譜法の分析を通じて、不確定な時間構造の構築プロセス、目的、そこから導き出される演奏上の効果としての即興とアレアトリーの問題について検討する。ここでは、「数字+s記号」と拍子記号という2種の言語の用法が楽曲の展開とともに変化し、記譜と実践との狭間で、「数字+s記号」が拍子記号を排除し再びそれを必要とするに到るプロセスが明らかになる。また、異なった時間構造を並行させる手法には、セリ一的に構想された持続の中でブロック・ソノールが管弦楽の音色により、どのようなタイミングで分析されるのか、という問題に対する多様な可能性も見出される。初版からは、2種の言語を駆使した管弦楽ならではの不確定性の導入方法と記譜法が、文脈に応じてさまざまに探究された痕跡が窺われ、その意義は、伝統的な小節線の意味を変革し、楽曲を構成するテキストを持続と音響の観点から豊かにすることにある。

第2章では、そうした不確定性が改訂版に向け削減される過程を分析し、その理由を考察するとともに、僅かに残された不確定性の特徴をふまえ、同時期の他作品の動向も参照しつつ、初版の試みがどのように昇華されたのかを検討する。不確定性の削減は、「数字+s記号」の廃止、小節線の統一、あるいは不確定な要素が部分的に挿入される頻度の軽減を通じ、大幅に行われた。こうした確定作業が遂行された契機には、大編成における演奏現場の問題を経験した作曲家の、楽譜の実用性への志向があった。しかし改訂版では全体的に、不確定なニュアンスの発想標語や注釈によって柔軟な分節法の余地が残され、特にピアノとオーケストラの関係においては、ブロック・ソノールの分析にも関わる相互干渉の可変性と演奏者に要求される俊敏な即興性が制限されつつも維持されており、さらに他作品では、「数字+s記号」がsの文字を略しつつ積極的に展開されている形跡も見出されることから、作曲家が当初の不確定性の理念や目的を必ずしも放棄したわけではなく、「数字+s記号」と拍子記号という2種の記譜法上の言語をめぐる探究も継承されていったこと

が理解される。したがって改訂の意義は、作曲家が自身の不確定性に対する本質的な関心が即興を含む演奏解釈における作用の部分にあることを再発見した上で、不確実な記譜法の必然性を再検討し、近似値的でありながらも無限に残されていた持続の可能性の中から作曲家自身が最適と考える1つを選択し、音響を再編集した点にあったと推測される。

《たまもの》創作過程に確認されるこのような経緯は、今日の作曲家に、大編成である以上最低限考慮すべき事柄をふまえた上で、不確定性を記譜法により意図的に楽譜に内蔵させるべきか、それとも記譜法の合理性を優先し適切な補足によって演奏解釈に働きかけるべきか、という課題を投げかけるとともに、不確定性に基づく即興によって得られる、管弦楽あるいは大編成ならではの効果をさらに発展させる展望をもたらす。ブーレーズによって論理的に示された、持続やタイミングに関する演奏解釈を指揮者に積極的に委ね、音色操作という管弦楽法的なアプローチと融合させることで作品のテキストと展開を活気づける効果のほか、指揮者と演奏者の関係に緊張感をもたらす効果も想定しうるだろう。この効果を客観的に立証するのは困難だが、それは記譜法によってしか実現できず、かつ演奏の場においてしか認知されえないものであり、不確定と確定的確なバランスによってこそ得られることを特徴とする現象である。その実現には、いかに演奏者の想像力を刺激し、最良のタイミングを選択する努力を促し、指揮者と演奏者の関係をリハーサルにおいて活性化し、公演の場において頂点に達しうるような環境設定を楽譜に施すのかを考え実践することが重要であろう。現代の管弦楽作品における即興の可能性は最終的に、創作において、作曲家－楽譜－演奏家－聴き手という関係性を見据えつつ、作曲家があらゆる音の創出される様相について時間的な観点から向き合う行為に通じている。

(総合審査結果の要旨)

本論文はブーレーズ《プリ・スロン・プリ》第一曲の《たまものDon》の創作過程と作品分析を中心に、そこでの中心的課題と考えられる「演奏における確定と不確定性の問題」を、今日の創作という観点から、さらに今日の創作=自身の作品へと問いかけている。

田上はバーゼルのパウル・ザッヒャー財団での自筆譜調査を行い「たまもの」の創作過程を分析して、主に「不確定性」による記譜法から生じる、リハーサルや演奏上の課題による初版、改訂版間の「改訂」の問題から、現代音楽における「即興」の可能性を研究している。

その分析法は極めて厳密であり、研究論文として十分評価出来るが、ヨーロッパ音楽における作曲・演奏・記譜といった歴史的な視点からの考察が必要であることも否めない。こうした根本的課題と、個々の音楽作品の特殊性を比較する際不可避となる問題について、研究者がいかなる視点を持ちえたかという事に関しては、残念ながら論文からは読み取れなかった。

また終了作品、オーケストラのための《ヴェニュール》について、作曲科専任教員5名で行われた審査でも、田上自身の創作と前述の問題性について、いま一つ納得できる回答が得れなかったのは残念である。しかしながら研究論文における資料調査の成果にもとづく厳密な分析を評価して課程博士を授与することにする。